令和８年度　ふじのくに生物多様性地域戦略推進会議　議事録

日　　時	令和８年９月４日（金）午後１時 30 分から午後３時 30 分まで
場　　所	静岡県庁別館９階特別第二会議室
出席者職・氏名	**委　員**（敬称略、五十音順） 飯塚優子、岸本年郎、木下聡、熊田功、五箇公一、小南陽亮、清水久美子、山崎宏（８名） **事務局** 大川井くらし・環境部参事兼環境ふれあい課長、寺澤自然保護課長、大川鳥獣捕獲管理室長、横井自然保護・管理班長、堀田主査、栗本主事、中村主任 **庁内推進会議代表課** 企画部企画課 青山主任、危機管理部危機政策課 寺田主事、くらし・環境部企画政策課 勝田主任、健康福祉部衛生課 土屋主査、経済産業部産業政策課 服部主事、経済産業部農地計画課 大間主査、経済産業部森林計画課 山上主査、交通基盤部河川企画課 藤原河川企画班長、教育委員会事務局教育政策課 戸田主査
議　　題	・令和７年度ふじのくに生物多様性地域戦略の進捗評価 ・次期生物多様性地域戦略の策定について
配布資料	・令和８年度ふじのくに生物多様性地域戦略推進会議　次第 ・ふじのくに生物多様性地域戦略推進会議出席者名簿及び座席表 ・ふじのくに生物多様性地域戦略【令和７年（2025 年）度 評価書】（案） ・管理指標評価一覧 ・管理指標の現状と分析及び今後の対応 ・次期生物多様性地域戦略の策定について ・ふじのくに生物多様性地域戦略 2018-2027【要約版】 ・＜改訂版＞ふじのくに生物多様性地域戦略 2018-2027【概要版】 ・＜改訂版＞ふじのくに生物多様性地域戦略 2018-2027【全体版】 ・生物多様性国家戦略 2023-2030 概要版 ・静岡県総合計画概要版 ・第４次静岡県環境基本計画概要版 ・（改訂版）第４次環境基本計画骨子案 ・ふじのくに生物多様性地域戦略推進会議設置要綱 ・ふじのくに生物多様性地域戦略推進会議委員に対する報償費及び旅費に関する取扱

１　会議成立の確認

委員 11 人中８人の出席を確認。ふじのくに生物多様性地域戦略推進会議設置要綱第５条第３項に基づき会議成立。

２　審議内容

（１）令和７年度ふじのくに生物多様性地域戦略の進捗評価

発言者	内　容
委員	30by30 の面積について、私が計算した限りでは、静岡県では既に 33%程度を占めているのかなと思います。陸域と海域それぞれ 30%を保全するとなっていますが、この保全面積は陸域だけではなく海域も含めた面積ということになるのでしょうか。もし、陸域と海域それぞれに分けた場合に、県としてどれぐらいの数字になっているか教えてください。
事務局	指標で掲げている目標は陸域のみとなります。保護地域とその他地域ということで主に自然共生サイトの面積となります。３割を既に超えているのではないかというお話ですが、保護地域等を全て足していくと実際３割を超えています。ただ、これは重複する部分が相当数含まれており、例えば、本県の場合、富士箱根伊豆国立公園が自然公園として全て対象となりますが、その中には鳥獣保護区が相当数含まれています。また、自然共生サイトについても重複する部分があり、本県の場合、南アルプスの山岳区域が製紙会社さんの土地になりますが、そこを全て自然共生サイトに登録いただいています。ただ、そちらについても、国立、県立の自然公園が重複している部分があったり、鳥獣保護区も重複していたりしています。このため、重複部分を除くとまだ３割には達していないという状況です。海域については、全国的にまだまだ 10 数%というところかと思いますので、本県においてもその程度だと認識しています。なお、県として把握できる部分については陸域の部分になるため、まだ３割に達していないということで、これからも自然共生サイトの登録を頑張っていきたいところになります。しかし、残念ながら、鳥獣保護区の指定解除があり、自然共生サイトで増えた面積よりも多くの面積が減ってしまっているという実情があります。これは評価書等に記載していますが、シカ被害の影響等で狩猟を進めなければいけないという状況の変化により、やむなく指定解除という部分があります。これも含めて、今後どのようにしていくか考える必要がありますが、引き続き取り組んでまいります。
委員	今説明いただいた鳥獣保護区の解除について、シカ害を低減させるためにという事情があると思いますので、単に面積が減ったという話だけではなく、しっかり手を打っているということを明記いただいて、面積が減っている要因が分かるようにしておけば良いと思います。シカの問題については、検討すべきことがたくさんあると思うため、次期地域戦略に反映させる必要があるとは思います。ここでは、単に面積だけの話ではないということが分かるようにしておく必要があるかと思います。
委員	考え方の確認をさせてください。現時点の評価を聞かせていただいて、次期地域戦略に向けては、ウィークポイントに向けてより注力していく考えがあるのか教えてください。現行の地域戦略は、幅広い分野をカバーしているかと思いますが、その中で注力するところを絞るために、現状の評価

	を行っており、次期地域戦略では現状達成していない顕著なところへ注力するといった考え方もあるかと思います。この現状の評価を次期地域戦略にどのように活用していくのかという見解を教えてください。
事務局	御指摘のとおり、県の計画になりますので、相当幅広い分野にわたっており、網羅的に生物多様性に少しでも関わるような部分はかなり入っている状況です。こうした中で、定量的な評価をするために指標を掲げて、その進捗を説明差し上げたところですが、数字に反映されないような定性的な部分についても、評価書として各部局が取り組んでいることを記載しているところです。今後はどこに重点を置くかということについては、しっかり進捗しているところは、このまま継続して頑張っていきたいと思います。また、目標値に達していない、若しくは基準値よりも下回ってしまっている指標については、その原因等を明確にしながら、そもそも指標自体が現状の施策にマッチしているのかというところも考えながら進めていきたいと思います。状況も 10 年前とは大きく変わってしまっており、例えば、クマの問題は５年前 10 年前にはほとんど出てこなかったですが、ここ数年はかなり話題になり対応等を進めているところです。それについても、今後、様々な施策に取り組んで人身被害の発生を抑えるなど、何らかの指標を考えていきたいと思っています。全分野様々な部分について構成も含めて、見直すところがあるかと思います。決して弱いところだけを良くしていくのではなく、やはり全般的な構成となってしまうというところは仕方ないかなとは思いますが、ただ、弱い部分は見直しながらしっかりと進めていきたいと思います。
委員	クマの被害について話題に上がりましたが、狩猟者の登録件数に関しては静岡だけの問題ではなく、全国的に登録者数が伸び悩んでるかと思います。現状はＫＰＩの達成としては、今ひとつ足りないという状況で、静岡県としては、新規登録者を増やすためにどのような活動をされているのか教えてください。
事務局	狩猟者の確保について、狩猟免許を受ける方は比較的多いですが、その方々が実際に狩猟に取りかかるところまで行くことが難しいという現状があります。そのため、本県では研修に力を入れており、まずは、興味を持って狩猟免許を取得いただいた方を押し上げる研修ということで、学生を対象にした研修や狩猟に興味のある方向けの研修、どうやって免許を取得していいのか分からない方向けの研修などを開催しているところです。その他にも、実際に捕獲した後にどのように有効活用すれば良いか、要は、ジビエに関することを学べる研修やある程度狩猟を経験してきた方向けの研修など、レベルによって対応した研修を実施しており、狩猟者の底上げを図っている状況です。
事務局	補足として、狩猟登録者数自体は高齢化ということもあり下がってしまっていますが、年齢構成自体は、若い人たちが若干増えているという明るい兆しもあります。狩猟免許の申請数も相当増えており、おそらくクマの問題が全国的に話題となって興味を持っていただいているのかなと思います。近年はこういった明るい兆しもあるということを補足させていただきます。

委員	確認となりますが、管理指標評価一覧に書いてあるこの指標は、次期地域戦略の策定の際には、項目自体の見直しを行うという認識でよろしいでしょうか。
事務局	指標自体の見直しも行います。残る項目もあると思いますが、すでに施策としてあまり力を入れていない指標もあると思いますので、評価が新しくできるものに置き換えることを考えています。
委員	例えば、基本方向２の７番、「県立青少年教育施設の利用者数」は生物多様性云々よりも少子化の問題や学校の授業時間数の問題など、いかんともしがたい外的な要因があり、逆に、利用者数を頑張って増やしたところで、それは生物多様性保全に資するのかという問題も出てきてしまいます。こういった指標であれば、定量的な指標ではなく定性的な質的な指標にするなど、そういった見直し方もあるのかなと思います。こういった見方をすると一度見直しても良いと思われる指標が散見されるので、どこかのタイミングで見直すべきかなと思います。
事務局	まさに次期地域戦略の策定の時期になりますので、その新戦略に向けて抜本的な見直しを行いたいと思います。
委員	指標の中でよく成果の上がっているものとして、「犬猫の殺処分件数」があります。当初は 719 件だったものが、今年度、昨年度劇的に減っていますが、野良猫が減っているのか、持ち込みが減っているのか、要因が分かれば教えてください。
代表課	殺処分件数は、静岡県としての数値にはなりますが、その中には政令指定都市である静岡市と浜松市の数値も含まれています。両市ともに、静岡県と同様に、動物愛護の普及啓発活動に努めており、県は、小中学校を対象とした動物愛護教室や若い世代への教育に力を入れています。推測となりますが、おそらくそれが功を奏しており、県民全体の動物愛護精神に繋がって、結果的に飼っている犬猫を保健所に連れて行くという考え方が大分減ってきているのではないかと思います。また、持ち込まれる動物の多くがいわゆる野良猫で、昨年はそれが大体半分くらいまで減っていましたが、飼い主のいない猫を去勢する際の助成金を県内全市町で設けており、ボランティアの方々の努力により、地域的にＴＮＲ活動と呼ばれる不妊去勢手術をして、飼い主のいない猫がこれ以上増えないようにしている効果が大きいと思います。
委員	非常に進展したことなので、現状分析や全国との対比もしていただければと思います。また、ここまで進んでいるということを県民の方々にアピールして、さらに減らしていきましょうという空気が醸成できればなお良いかなと思います。
委員	私自身もサステナビリティ推進担当として、次の中期計画をどうするのか、各事業本部にどのような目標を作ってもらうかということに、いつも頭を悩ませています。弊社の場合は、サステナビリティはサステナビリティ推進部がやるものでしょうという空気を出さないために、「全員参加」を旨としていて、全ての部署に目標を作ってもらっていますが、結果的にあまり効果的でない目標が入って来てしまうことがあります。次期地域戦略の策定においては、生物多様性に関係する部局だけで目標等をたてるというパターンと、全庁的に目標を作ってもらうというパターンがあるかと

	思います。現行の地域戦略は、全庁的なものなのか、そうでないのか教えてください。
事務局	生物多様性に少しでも引っかかりそうな部局に関しては、全て関わってもらっている形になります。目標設定に関しても、それぞれの部局が出してきてもらったものを、当課で取りまとめている状況です。場合により、目標を変更したりはしていますが、基本的には各部局が考えた目標となります。ただ、個人的には、生物多様性の分野別計画としては少し幅が広すぎるという思いもあるため、そこも含めて見直しをかけていきたいと思っています。環境系の計画としても、環境基本計画という計画が上位計画としてあり、地球温暖化の実行計画もあります。環境分野だけで関わる計画がいくつも他にもあるという現状で、重複する部分もかなりあると思います。ただ、国家戦略もかなり幅広い計画となり、そことの兼ね合いもありますが、もう少し絞り込んだ方が良いかなという思いがあります。
委員	この地域戦略の影響範囲として全県を見た時に、南アルプスから駿河湾までの高低差と東部・中部・西部それぞれの地理的な特徴の幅広さがあると思います。静岡県が国家戦略を参考にすることと同じように、各市町においても県の地域戦略に基づいて、各市町の計画や緑の基本計画などが策定されているのでしょうか。静岡県は東部・中部・西部の特色が本当に豊かで、それにひも付いて生物多様性もバラエティー豊かということが特徴だと思います。そこを意識されているのか伺いたいです。
事務局	御指摘のとおり、本県の場合、場所によってかなり状況が違うということもあり、地域戦略の後半部では地域ごとの戦略を掲げています。また、評価についてもそれぞれの地域で出しているため、地域性については意識しています。また、市町においても、県の地域戦略を参考にしていただいていると思いますが、これに倣って作るということをお願いしているものではないため、あくまでも参考にということになります。次期地域戦略の策定の際には、当然、各市町に意見照会をかけて策定していくことを考えており、各市町においてここは違うとかこれを見てくれという意見がありましたら、そちらについても反映していきたいと思っています。
会長	全般的に幅広い地域戦略であり、評価も定量的に評価していただいているため、一定の評価に値するものだと思います。一方で先ほど委員から御指摘あったように、面積だけじゃないというのは結構大事だと思います。シカ対策自体は、それをやることで生物多様性が回復する面もある。環境省の整理が必要だと思いますが、30by30 の達成をするために面積で割り当てをしていますが、一番大事なのはネイチャーポジティブです。要は、しっかりと生物多様性が回復するということ、そういった形での評価をぜひ積極的に考えて良いのではないかと思います。せっかくシカ対策をしているのに面積は減ってしまっているため評価が下がってしまう。ネイチャーポジティブに資する活動をして、しっかり貢献しているということを前向きに評価した方がよろしいかと思います。

（２）次期生物多様性地域戦略の策定について

発言者	内　容
委員	このような行政のプロジェクトは、一度策定されるとなかなか変更ができなく、中間評価として見直しをしますが、枝葉の部分は改定されても根本

	的なところはなかなか変えられないものです。今回、これを機にぜひ挑戦的な見直しをお願いしたいと思います。静岡県には非常に多様な環境があり、高山から深海までと広く言われますが、森林にしても人工林はもちろんたくさんあり、ブナ林もあれば照葉樹林もあります。また、沿岸も伊豆から西部地域まで幅広くあります。そういった面で日本の様々な自然環境が何でもあると思います。無いのは陸から離れた海洋島ぐらいです。そのため、これらの自然環境に対するしっかりとした取組をしていただくということは全国的にも先進的なものになると思いますので、ぜひ根本的な見直しを行っていただき挑戦的な内容にしていただければと思います。具体的に私から申し上げたいのは、これまでこういった生物多様性戦略では、大きなものとして、希少種をどのように保全していくか、もう一つは外来生物対策ということが大きな二つの柱でした。次期地域戦略では、希少種や外来種に対する対策は引き続き重点的に取り組んでいただくことは前提として、希少ではない在来生物をどう保全管理していくかという点を重視していただきたい。在来生物の生息環境と人がどう共存していくのか、静岡県内でどのように整備していくのかというところを大きな課題にしていただきたいと思います。先ほどの策定方針における生物多様性に関する現状と課題を的確に記載するというところで、こういった在来生物の保全、管理をうまく実施していただくことは、話題になっているシカやクマの問題や身近にいるスズメやツバメ等の減少問題、静岡県でいうとウナギの減少問題など、こういった在来生物と静岡県に住む人がうまく共存できる環境をどう整備していくかというところを明確にすることだと思います。これに対してどう取り組んでいくかを行動方針に落とし込んでもらいたいと思います。特にシカ問題は、評価の部分でも取り扱われていましたが、捕獲による個体数管理はどうしても短期的な対策となってしまいます。もちろん、捕獲をしなければならない状況は承知していますが、捕獲による管理では絶対に解決しません。長期的に見ると、ある程度安定した頭数に落ち着いたとしても、何らかの理由、例えば、予算が足りなくなったとか狩猟者がいなくなったとかそういった理由で捕獲圧が低下すると、すぐ増えてしまう生物です。シカというのは外来生物ではなく古来から日本にいる在来生物です。そのため、本来は日本の自然環境でしっかりとバランスをとって生息できる動物です。それが今明らかに異常に増殖している状況になっており、温暖化により冬の寒さが緩和された、大規模な耕作放棄地が増えたなど理由が様々研究されていますが、とにかくシカが増えやすい環境になっています。そのため、そもそもシカが異常に増殖しない環境にしていくということが非常に大切です。シカには２種類の性格があり、草原で大きな群れを形成するシカと森林で小規模な群れを形成するシカがいます。今は、人間の影響で、草原性のシカが増えてしまっているため、根本的な解決をするためには、草原性の環境を少なくするという施策をしないと、長い目で見た時に解決には繋がらないと思います。ただ、これは簡単なことではなく、その環境を整備していくとなると、森林の場合、土地の所有問題などややこしい問題が起こるため、なかなか一度には進みません。ただ、時間のかかる問題ではありますが、始めなければ始まらない解決策であるので、こういった在来生物とうまく共存できるような環境を整えていくことを全国に先駆けて入れていただきたいと思います。もち

	ろん、予算や人材が限られていることは承知しているため、策定方針には企業や団体等の多様な主体で対策、連携するような記載として、全県的にこういった環境を整備していくことを入れていただけると、非常に将来に期待ができる戦略になるのではないかなと思います。
事務局	おっしゃる通り、まさに生物多様性ですので、希少種や外来生物だけではなく、在来種、普通種などあらゆる生物が生息生育できるということが非常に大事だと考えています。県においても、身近な例で言うと浜名湖のアサリが全然取れないという話もあり、環境が昔とは大分変わってきていることを実感しています。捕獲だけやれば良いわけではないというところは、まさにその通りでありまして、野生生物全般と人が軋轢なく共存できるという考え方は必要だと思っています。とはいえ、シカについては捕獲圧を緩めるわけにはいかない状況のため、当面は捕獲圧をかけ続けるところをやっていきますし、クマに関しても、捕獲というところに焦点が当たりがちですが、やはり数が多いものではないため、問題個体については捕獲しますが、環境整備をしていくためにもクマの計画を作っている状況です。全般的に、やはり環境の整備ということは非常に重要だと考えていますので、御意見を踏まえて、次期地域戦略に反映できればと思います。
委員	現在、推進会議の名称は生物多様性という言葉になってしまっていますが、弊社では「ネイチャー」を使うようにしています。「自然」には、水も大気も土もそれから鉱物資源も全て含まれ、生物資源の中に動植物の生物多様性があるため、本来整えるべき環境とは、実は生物多様性よりもっと広い話だと思っているからです。以前は脱炭素がすごく人気で推進されてきましたが、今ではネイチャーポジティブをどうするのかということが話題になっています。実際には、双方がそれぞれ関連し合っているものであり、そして人々の暮らしにもすごく深く関わっています。改定作業に携わる立場としては、一辺倒な印象にならないよう、包括的に取り組んでいくものだということを念頭に置いて関わっていきたいと考えています。こう考えた際に、県が目標を立てて内包する形で市町があると思いますが、そこには市民一人一人がいるため、戦略を進めていくことがその人々の暮らしにどのようにプラスになっていくのかというところをうまく表現することが必要だと思います。県民市民の皆さんをはじめ、企業に勤める社員も、行政だけがやるとか、企業だけがやるとか、ＮＰＯだけがやるということではなく、一人一人がそれぞれ積極的に関わる、目標達成に向かって動けるというような戦略にできればと思っています。非常に理想論で、国家戦略や総合計画など上位の計画がたくさんある中でどうするのかという課題はありますが、私としてはそこを忘れないように、議論、検討を進めていきたいと考えています。
事務局	手前味噌ですが、現行の地域戦略の中で、これは良いなと思ったものがありまして、行動計画の中に、県民の取組や事業者の取組という項目を掲げています。県が立てる計画は、大体どの計画も、県がこういった施策を実施するというものですが、この戦略に関しては、県民、事業者の目線でやっていただきたいことを掲げています。まさに委員から御意見いただいた様々な主体が一体となって、ネイチャーポジティブが掲げられている今の国際的な枠組の中で何ができるのかということを、それぞれが考えていただけるような構成になっています。引き続き、この枠組はあまり変えずに

	ブラッシュアップしながら、進めていきたいと思います。
委員	一県民として、普段の生活の中で生物多様性を意識するということが、少し難しい現状があるのかなと感じています。自分が活動をする中で、若い世代が身の回りの生物や自然に触れ合うという機会が驚くくらい少なくなっていると日々感じています。子供にとって、それが当たり前の環境になってしまうのであれば、この世代がこれからの担い手になることを考えると、やはり自分の身の回りの生物多様性というものを感じながら、行動変容に繋がり、将来どうしたらいいかということを自分たちで考えてもらうきっかけを作る必要があるのではないかと思っています。実際、里山も荒れてきたり、自分の身の回りのほったらかしになっているものが、自分たちの暮らしにも影響があるということを、感じてもらえてもらうことが必要だなと思います。また、資料の５ページで自然共生サイトとして、県土の 3.2%が認定されているということで、本当にたくさんの事業者の方が整備してくださっていると感じますが、こういった自然共生サイトに行くとかではなく、自分たちの身の回り、身近な家の周りという視点も大事なのではないかなと思います。７ページでパートナーシップ制度とあり、環境保全団体の方が登録されていますが、こういった団体の方と一緒に活動するということも、もちろんすごく大切なことだと思いますが、普段の生活の中で自分たちで取り組めるような、わざわざ出かけていかなくても、何か活動に繋がることがあれば良いのかなと思います。今、学校では、1 人 1 端末が進められていて、子供たちはこういったデジタルなものを自分たちよりもどんどん積極的に取り入れています。こういった中で、例えば、アプリを使った自分たちでやってみたくなるような仕掛けみたいなものがあると良いではないかと思います。
委員	計画期間について、次期地域戦略の始期が 2028 年となっていますが、2031 年から新しく国家戦略が始まることに合わせて抜本的な見直しと書かれており、これはかなり重要なところだと思っています。現行の地域戦略を策定する際も国家戦略を参考としながら作成しましたが、その国家戦略は 2020 年までの計画だったため、地域戦略は途中で中間見直しとして大幅に見直していただいていたと思います。今回は、それをしっかりと国家戦略に合わせようという記載となっており、とても良いことだと思います。一方で、現行の地域戦略については、10 年間のレビューをしっかりするべきと思いますが、それをどのようにする考えでいらっしゃるかを伺えればと思います。この 10 年間は様々な社会の変化、環境の変化もありました。その中でできたこと、できなかったことがあり、それを踏まえて次の 10 年、どこに重きを置くかを考えていくことが必要だと思います。現行の地域戦略が終わってからではなく、2018 年から何ができてきたのかということを次回以降に可視化して、次に繋げるにはどうしたらよいかということを議論できるような場所になると良いなと期待しています。
事務局	期間につきましては、当初我々の内部でも色々と議論がありました。国家戦略が 2030 年までのため、短期にはなりますが一度 2030 年までの計画で考えるという話もありました。しかし、国家戦略が 2031 年にすぐに次期戦略ができるようになるのかということが分からない状況のため、本県では本県の計画期間のローリングの中で 10 年とすることで良いのではないかと考えた次第です。ただ、ここでは 2030 年に抜本的な見直しと記載

	していますが、次の国家戦略が出た後にその内容を反映するための見直しをしたいと思っています。また、現行の地域戦略を途中で見直したのは、2023 年の国家戦略ができる前でした。中間見直しはあくまでも県の計画期間 10 年の折り返しである５年を意識したもので、国家戦略を意識したわけではなかったということもあり、そこは反省点だと思っています。国家戦略が新しくなった時に県も見直せばよかったと思うところがあるため、そこも踏まえて、次期地域戦略は、国家戦略にしっかりと合わせていきたいと思っています。また、総括的な評価に関しては、来年度の評価を実施する時に、この 10 年間の総括的な評価、若しくは、折り返しの５年間の評価をした上で、課題等を掲げて次期地域戦略に活かしていくことを実施していきたいと思います。これまで、単年の評価を実施してきましたが、そうではなく、10 年間でやってきたことを県民の皆さんに知っていただき、総括的なものを考えていきたいと思います。
委員	私もこの期間のことは気になっていまして、一生懸命作った２年後に抜本的な見直しをされてしまうとモチベーションが高まらないというところがありました。しかし、今おっしゃられたように、国家戦略自体が、前回 2020 年から３年あけて計画されたことを考えると、本当に次期国家戦略が 2030 年に出るのか分からないという点で、あまり合わせようとし過ぎずに、県独自のスパンでやっていく方が良いのかなと思います。ただ、スタンスとして、もちろん国家戦略にある程度沿って県の方向性が定まることがもちろん望ましいですが、特に生物多様性は地域性にすごく根付いているため、どこでやっても同じ測り方ができる CO2 などと異なり、国家戦略にどこまでの解像度が求められるのかということを疑問に思います。むしろ、国家戦略の規範になるような先進的なチャレンジングなものを静岡で作って、それが国家戦略に影響を与えて、次期国家戦略ができたけど、抜本的に見直さなくてもいいよねみたいな状況が一番良いのかなと思います。そもそも、そこまでかい離することはないと思いますが、生物多様性というこのテーマが、こういった特殊性を持っていると思っており、国の方向性に沿って、各地で同じように一律で活動や測り方とかができるものではないと思っています。逆に、静岡がこういうことをやったということが、他県で応用できるとも限らないと思っており、むしろ国家戦略に影響を与えるようなものができても良いのではないかと思います。
委員	こういった戦略を作り直す時は、やはり誰に何を伝えたいかを一番最初に持ってくることが大事だと思います。今回の地域戦略でいくと、決して国に見せるものでもなければ、知事に見せるものでもないと思います。おそらく皆さんがお伝えしたいのは、県民の皆様に各地域の生物多様性の取組などをお伝えされたいということだと思います。そのため、作り上げていくときには、委員の皆さんからお話がありましたが、ぜひ官民連携の事例やエピソードトーク、インタビューなどをふんだんに使用されると良いのではないかと思います。例えば、企業の社長が出てくれば、そこの従業員は否応なく見ることとなるため、戦略が広まっていきますし、大学の教授が出てるインタビュー記事があれば、そこの学生も見ることとなるため、こういった広め方や周知方法も工夫されても良いと思います。パートナーシップ協定を我々も結ばせていただいていますが、まだ４件だけでは寂しいところもあるため、このあたりが拡充していけば、そこの地域の方や企

	業の方、従業員の方がこの戦略を理解しながら活動を進めていっていただけると思います。私もこういった計画を作ったら、作り終えたところで終わってしまいがちですが、やはりこれを知ってもらって皆さんが各地で活動していただくというところが必要だと思いますので、ぜひこういったプロモーション活動なども考えられても良いと思います。
委員	資料の 11 ページ目に策定方針が記載してあり、委員の皆様からも出てきましたが、５ポツ目の多様な主体が一体となってというところはとても大事だと思っています。ここの書きっぷりや具体性みたいなものがメッセージとして次期地域戦略には書いてあるべきかなと思います。一方で、今、様々な計画の中で、この多様な主体の連携のような文言が入っています。教育や観光、農村振興、福祉など、全てに記載されています。要は、もう行政だけではできないし、市民だけでもできない、当然企業だけでもできないから手を携えましょうという理屈です。この化学反応を期待するためにおそらくこういう視点になっていて、それは当然のような気はしますが、やはり生物多様性保全ならではの新しい連携の枠組を、戦略の中にどう書けるかということはとても重い宿題だなと思い感じていたところです。いずれにしても、環境問題や生物多様性問題は生物だけの問題ではなく、県土をどう利用していくかぐらい壮大な課題と紐づいてくると思います。こう考えると、そこに向けて、この多様な主体の連携というものはどうあるべきかみたいなものは、やはり相当考えなければいけないと思いました。いずれにしても、机上の論理だけではなく、県民一人一人が我が事にするためにこの５ポツ目のところが具体的に示されているということがとにかく大事で、今、委員がおっしゃったようにここの書きっぷりで、ここに書いてあるだけではなく、自分もその連携の一人なんだということが分かるようなＰＲの仕方をすることで、初めてこういった戦略は生きてくるのだろうという気がします。もちろん、生物の専門的な見地から書かなければいけないこと、書くべきことはありますが、その連携の仕組みがどうしたら一番効果的なものになるのかというところを意見として申し上げたいと思います。
委員	管理指標を見直すに当たって、数値目標を立てなければいけないということで、全て数値で表されています。確かに数値目標は、この数字を達成できればよいということで、分かりやすいことは分かりやすいですが、一方でこの数値が達成されたことが本当に生物多様性の保全にどれぐらい繋がってるか、この数字だけ達成できればいいという考えになっていないか、そういった問題が出てきます。次回の見直しでは、必ずしも全て数字化しなければならないというわけではないと思っており、定性的な指標でも良いのではないでしょうか。もちろん、本当にその指標が達成できたかどうかが分かりにくいという意見も分かりますが、こういった委員会の場で、具体的な資料に基づいて、専門の委員の先生がきっちり検討できるため、必ずしも全部が全部、数値目標で評価するということにとらわれないように検討いただければと思います。
委員	日本は 2010 年に愛知目標ができて、2020 年までの 10 年間の目標は何一つ達成できませんでした。「生物多様性の主流化」を目指し、色々な媒体を使って、みんなで何々宣言をしようとか様々な施策をされたと思いますが、なかなか実現できませんでした。そこから既に 2026 年になっている

	わけですが、改めて、どうやって県民一人一人に何を伝えていくのか、自分も自然の中の一部なんだということがどうやったら伝わるのかという試行錯誤の歴史があると思います。県・国レベルでもこれまでの結果を真摯に受け止めて、どういった目標だったら色々な人を巻き込んで、良い目標にできるのかということは本当に知恵を絞れればと思っています。最終的には、一番高い山から海まである静岡県民が一番熱心だよねみたいな、国の国家戦略をよく見てみたら静岡県と一緒だったよねというような、そういった戦略にできることが良いかなと思います。最後に一つだけ、国の次期戦略ではおそらくクレジットの話が出てくると思います。いわゆるカーボンクレジットが今真っ盛りですが、既にネイチャークレジットや生物多様性クレジットの話があり、目標を達成しようとするとやはりそういったクレジットの導入で資金を呼び込んで、どうやって保全に役立てていくか交換していくかという話になります。こうなった際に、国も環境省だけではなく、経産省、国交省、林野庁がいつも一緒にやっているように、おそらく静岡県でも自然保護課の皆さんだけでは解決できない問題も出てくると思いますので、その際は、縦割りの発想にならず、よりよい戦略が作れれば良いと思います。
会長	色々と御意見いただきました中で、私も考えるところがあり、例えば、数値目標の意見がありましたが、国家戦略では、これまでむしろ少しぼんやりしていたところをあえて数値目標に置き換えた分野があります。外来生物対策と化学物質管理のエリアですが、どちらもリスクを 50%半減させるという数値目標を立てました。そうでもしないと、なんとなく駆除しました、頑張ってこれだけ活動しましたで済ませていた目標が、生物多様性にきちんと反映されないということでこういった目標が設定されました。県においても、これだけたくさん外来生物がいるという状況においては、活動量のみならず、それによってどれだけ外来生物を減らせているか、あるいはそれが功を奏してどれぐらいネイチャーポジティブに貢献しているかという評価を軸として入れていくことが必要です。また、どの地方もそうですが、化学物質のリスク評価がほとんどされていません。これは生物多様性に対する大きな負荷でありリスクであるという観点からも、化学物質の使用量やリスクそのものがあるということを反映させる目標は、どこかで入れる必要があるのではないかと思っています。また、先ほど在来種、普通種、そういったものも含めて多様性という話で、これは全くおっしゃるとおりだと思います。健全な生物多様性を維持するということが一番肝心なところで、全体としての多様性指数という部分が、どうやって維持され、それが増加しているかといった指標作りはこれから重要になってくると思います。クマシカ問題についても、狩猟してとりあえず捕獲圧をあげて、問題となる個体を減らすということが重要になってきますが、これは国としても長期目標としてゾーニング、里山エリアをしっかり管理するということを掲げています。人間活動で里山をしっかり管理すること自体が、実はこういった動物たちを奥山に閉じ込める上で重要であり、そのゾーニングというキーワードはこれからも大事になってくると思っています。それから、温暖化問題がどうしても先行している状況については、温暖化の方が圧倒的に予算が大きいですし、先ほど御意見あったように CO2 を減らすというパラメータがはっきりしているため分かりやすいと

	ころにあります。ただ、やはり生物多様性がしっかりしてないと、結果的には自然資源がどんどん劣化してしまい、人間社会の持続性が担保できません。現実、今、CO2 をゼロにしたとしても気温は下がらないですし、当分 100 年ぐらいは温暖化が続くということが分かってしまっている状況の中では、大事なのは温暖化に負けないレジリエンスをどう手に入れるか、グリーンインフラのような形で、温暖化対策と並行して、温暖化が進行する中でも強い生物多様性とは何かといったようなコンテクストが、これからの生物多様性戦略においては求められるのかなと考えています。また、主流化の問題ですが、これは国としてもずっと課題となっています。生物多様性をいかにして広めるか、まさに県民の皆さんの心に響くようなそういった生物多様性戦略にしていくことが大事で、全体的にこういった戦略や計画を見ている中で、他の地域に比べて、キャンペーン、シンポジウムや宣伝活動が今ひとつ希薄な気がします。むしろそういったところは、先ほど御意見あったように、しっかりと皆さんに届くような、刺さるような対策が必要になってくるかなと思っています。私としては、色々と御意見いただいた中で、方向性も含めて戦略の中にどう落とし込んでいくのかということを事務局として考えていただければと思います。

（３）総評

発言者	内　容
会長	本会議の結論として、令和７年度評価書は概ね順調に進捗していると評価していただいてよろしいでしょうか。
委員一同	異議なし
会長	次に次期生物多様性地域戦略の策定について、こちらについても委員の皆様から意見のあった内容を踏まえて、事務局の提案どおり承認していただいてよろしいでしょうか。
委員一同	異議なし